

<要約>

4-30

5.6 年生の総合での環境学習として地域の田んぼに連れていき、農業と環境の関連や課題が見えてくるようにするというのが当初の教員のねらいであった。

4 種類の田んぼを観察し、自分たちが調べたデータと、カエルの生態調べを経て、子どもたちは危機感を募らせ、そこから「田んぼは未来を救うヒーローだ！」をテーマに自分たちでグループを作り、取り組み始めた。地域の方や仲間の協力のもと自然環境の課題に立ち向かい、自分たちで作った田んぼで絶滅危惧植物がたくさん出現するという大きな成果を手にするに至った。そして子どもたちはこの田んぼでの活動を続け、「SATOYAMA 国際会議」にてクロージングスピーチとして英語を交えて報告し、世界へと発信することとなった。子どもたちを動かしたのは「科学的認識」「希望が見えるモデルとの出会い」「泥んこや生き物と触れ合うことの楽しさ」「自分たちが活動の主体」「現実の社会を変革する手応え」と筆者は綴る。

<プラス要素>

筆者も文中で「6 年生は忙しい」と述べているし、ここまで輪が大きくなることは予想できなかったかもしれないが、5 年生も環境学習に取り組んでいるのなら 5 年生あるいは学校全体に輪を広げ、役割分担をすれば植物・動物のことだけでなく天気との関連などといった理科的要素や地域の人の認識、農業界の現状・問題点などの社会的要素なども絡めて学習に臨めたのではないだろうか。

<幼・保でやるとすればどのような題材になるか、なにがねらえるか>

私が昨年の秋に実習させていただいた幼稚園では田んぼでの学習ではなかったが実際にお米のことを地域の方が園に来て子どもたちが質問するという場面があった。その話の中には今までの脱穀の歴史に触れたり、実際に教室で手で脱穀したりしていた。私はその場面しか見られていないが、この実習の前後には田んぼを絡めた活動をしていたことだろう。

活動と取り入れるとすると「土づくり」「種蒔き」「田植え」「収穫」の一連の流れを一年を通して体験することが一番良いと考える。実際に岡山県にある「いろは保育園」では 4 月から 11 月の約半年を通して連続した活動をしている。

そしてこの園の保育の特色として「生活力、生命力を育てる視点」「生活を豊かにするための科学的視点」「意識的、能動的に自然に働きかける保育」「生活を豊かにするための道徳的視点」という風に記載がある。まさにこのとおりであり、さらには「希望を紡ぐ教育 4 章 3 節」には子どもたちは泥んこになりながらリレーなどをして遊んでいたとも書かれているため、「遊びを生み出していく力を養う」「ルールを作って遊ぶ」などの想像力を育むことや「いつもと違う環境でいつもと違う友だちと関係を深める」などといった人とのつながりを深める力を育むことなども狙っていけるのではないだろうか。

1/2

<参考文献>

「いろは田園教室・田んぼ日誌から・いろは田園教室・稲作編」 田んぼ日誌から 片山  
嵩氏指導

<http://plus.harenet.ne.jp/~iroha/ricefieldmagazine.htm>

「社会福祉法人 山陽児童福祉会 山陽いろは保育園 清風いろは保育園」ホームページ  
[http://www.kosodate-web.com/sanyoujidoufukushikai/sanyou\\_profile.php](http://www.kosodate-web.com/sanyoujidoufukushikai/sanyou_profile.php)

「希望をつむぐ教育」行田稔彦 渡辺恵津子 田村真広 加藤聡一 編著

2/2

2/2

実践での教材 (本のまとめ+教材研究を加える・調べたこと+もっと発展した場合)

②

この実践では、4種類の田んぼに行きカエルの比較調査を行った。そこで、自分たちが調べたデータと、カエルの生態調べを経て、子どもたちは、危機感を募らせた。田んぼには、たくさんの働きがあることを学び「田んぼは未来を救うヒーローだ!」をテーマとして取り組んだ。田んぼで生き物を増やすため、稚魚を育て始めるのと同時に水槽や池などにも稚魚を入れ成長の違いを見ることにした。その結果、田んぼが魚を豊かに育むことを実感した。さらに、自分たちで「生き物いっぱい田んぼを作りたい」と提案し、自分たちの力で運営した。そこでは、水生昆虫を守るために始めた田んぼが絶滅危惧植物がたくさん出現するという結果につながった。

ここでは、地域の人と出会い子どもたちが課題をつかみ学習を進められるようにしている。

好奇心を湧き立たせ大人も興味を持ち、子どもに教えてもらうようにする。そして、大人がイキイキと取り組む姿を見せるのも必要だ。

発展としては、なぜ絶滅危惧植物が出現したのか、又、出現した絶滅危惧植物を増やすことはできるのかを研究する。

幼・保でやるとすればどのような題材になるか、なにがねらえるか

園庭や近所の畑など様々な所に虫探しに行く。そこで捕まえた虫がどこにいた、などの特徴を帰りの会で発表する。さらに、その虫を絵に表す。

ねらいは、生き物に興味を持って、楽しく探することができる。さらに、発表することで、その虫の特徴をよく観察することにつながると考える。また、絵に表すことで自由に表現する楽しさを感じることができるからだ。

#### 参考文献

・ [https://manatopi.u-can.co.jp/life/170926\\_1632.html](https://manatopi.u-can.co.jp/life/170926_1632.html)

〈実践での教材（本のまとめ+教材研究を加える・調べたこと+もっと発展した場合）〉③

これは6年生による地域の環境学習の実践である。この実践は、子どもたちが実感として地域の課題をつかみ、未来の希望を描ける「明るく」「楽しい」環境学習ができることをねらいとしている。そこで地域にある田んぼを題材とし農業と環境の関連や課題を見つけ出せるよう指導していく。ここではまず4種類の田んぼに目を向け、それぞれの特徴を田んぼに生息する蛙に視点を置き、調査していきながら田んぼにはどのような役割があるのかを知る。そして、そこから田んぼで生きる生き物への課題を見つけ、田んぼで生き物を増やすという活動に繋げている。

普段食べているお米を作っている田んぼというイメージのつきやすく、身近な環境で活動を行うことで、子どもたちは「環境」がどれだけ自分たちの日常にあるのか、共存しているのかを感じることができるのではないかと考える。そして、自分自身で気づき行動に移すという活動は、普段の生活から環境に意識を向けることができるのではないかと思う。自分の生きている場を知り深めるということは、これからの未来にとっても大切なことではないかと感じる。今回の活動の意義はそこにあるのではないかと感じた。

さらなる学びとして、田んぼ以外にも目を向け自分たちの周りにある環境では他にどのような生き物がいて、その生き物の周りの環境はどのような環境であるのかと深めていくことでより環境と自分たちを関連付け考えることができるのではないかと考える。また、生き物が環境によってどう進化してきたのかを深めていくのも面白いのではないかと考える。その環境の変化と進化を深めることで現在ではどのような環境問題が挙げられるのか感じるのではないかと考える。

〈幼・保でやるとすればどのような題材になるか、なにがねらえるか〉

今回の環境活動での実践に繋げることのできるような取り組みを行いたいと考える。幼保では、子どもたち自身が実際に、環境に触れることや身近に感じる事がまず大切なのではないかと考える。よくお散歩や遠足が行われていると思うが、その中で自分と環境の繋がりを感じる事のできるような保育者の言葉がけが重要になると思う。この季節にはこんな生き物がいるのだということや発見した自然の不思議など感じる事ができる活動を取り入れていく題材を用意する。例えば、身の回りに落ちている落ち葉で絵を作ってみたり、自然にあるもので工作をしそれを使い遊ぶことなどから環境に対する意識を気づいて行けるのではないかと思う。

今回の実践のような小学生の行なっている活動を見学しに行くこともいいのではないかと考える。そこで観察した小学生の姿や感じたものが子どもたちの刺激となり、環境に対する意識を高めていく事ができるのではないかと思う。

#### 参考文献

希望をつむぐ教育 人間の育ちとくらしを問い直す

編著者：行田稔彦、渡辺恵津子、田村真広、加藤聡一

実践での教材（本のまとめ+教材研究を加える・調べたこと+もっと発展した場合） (4)

・学校近くの様々な4種の形態の田んぼに出向きその田んぼごとのカエルの比較調査を行い田んぼの形態による生き物の豊富さの違いやカエルの生態と現在の田んぼの状態を調査する中で改善するため田んぼの持つ働きとともに学習を行っていく。

学校が管理する田んぼを変えていこうと研究を行い自主的に行う児童も出てきた、活動のikaiあり学校の教育から地域としての活動に広げた。

教材名を田んぼは未来を救うヒーローとすることで児童たちの意欲を持たせる内容となる大人が設定した状況でなく児童たちが調べ追及することが今後の調べ学習などに展開されてくると考える。

・土壌改革としては緑肥を撒くことで水はけの改善、地力の上昇に効果がある。

・本実践では田んぼをテーマに行いその中で児童たちは自分たちでやり遂げた達成感や自分たちで何かを変えていくことを学んだ。発展としてスモールステップではあるが近くの川や用水路にEM団子を使用し改善していくこともできる。学校のみだけでなく地域を巻き込むこともできなおかつ科学との関連性も生まれ生き物の生態なども学習できる。

製作に2週間かかるが並行して液体状のものも作ると液体状のものは家庭でも使用できトイレ、シンクなどで活用することができる。手入れをすることも大切になるため毎日短い時間であるが教材と向き合う事が出来る。

EM団子の効果として水質をきれいにする微生物によって水質がよくなる。植物がよく育つ生き物が戻ってくるなど様々である。例として6年生が作ったEMを1年生や2年生の植物育てる活動に生かすことで異学年との交流や低学年から微生物とのかかわりや植物の育つ環境について触れる事が出来ると考える。

また、中学高校で進むにつれ生き物や水質などの環境について知識が深まり個人としても取り組むことができる。また社会人になっても地域の環境を考える団体などとかかわっていくことができる。

2/2  
幼・保でやるとすればどのような題材になるか、なにがねらえるか

園内のビオトープや近くの用水路または、園内の生き物についてテーマを持たせる。

例えば 幼稚園のようなビオトープを所有している際にはどんな生き物があるかここに新しい生き物を入れてあげたいが今のままでいいのか投げかけ、メダカを飼う際には水草がいることや環境として配置したほうがいいものなどを考えていくことで生き物が増えることと生き物によって環境が違うことなどが学ぶことができる。

幼・保で行う際は写真や身近な生物で話をしていく子供たちも感覚として理解できると考える。

導入 生き物を増やしたいけどどうしよう

課程 どんな生き物なら入れてあげられるのか

その生き物は増やす環境にてきしているか

例ビオトープに海の生物は入れる事が出来るか等

近くの田んぼや用水路で生き物を捕まえてくる

その生き物にあった環境を作る

上記により子供は生き物によって生態が違うこと及び環境が大切だということに気づかせる。

#### 参考文献

www.emj.co.jp/blog/emxg/2016/07/05/em 団子ってなあに%ef%bc%9f と知らない方に・・・

1

2/2